おひさま通信

施設での暮らし

太陽の里

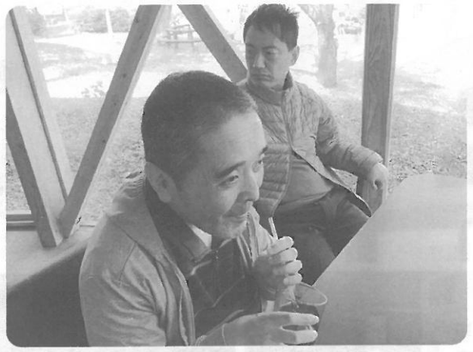
親ではない人たちとの暮らし

太陽の里が開所し20年以上がたち、20代であった仲間も40を過ぎ50歳を迎える仲間もいます。今までの家庭中心の生活から家族以外の同年代の人たちとの暮らしを積み上げる中で築いてきた仲間同士の関係、職員との関係があります。仲間達が集団生活でどのような豊かな青年期を過ごしてきたのか、今回一つの棟で生活している仲間の姿から変化をたどりたいと思います。

積み上げてきた人とのかかわり

服部智嘉さんは現在49歳です。里での生活では、自ら積極的に人に関わるという姿は少なく、暮らしの場でも控えめなところがあります。しかし、職員と目が合えば、少し顔を傾け、挨拶をします。お茶会時のコーヒータイムには、仲間がコップを持ってきてくれると、すっと手を出してコーヒーを飲む姿、仲間の脱ぎ捨てた靴下を見つけ、そっと片付けてくれることもあります。

集団の真ん中には入らないけどちょっと離れたところからみんなを見ている服部さん。そんな控えめな服部さんですが、そっとしておいてと思っているわけでもなく、自分から職員のおでこにチュッとしたり、頭の匂いを嗅いでニヤッとしていたり、そばに居てくれる人のことはしっかりと意識をして自分から係わることも大好きな服部さんです。



服部さん

2005年5月、そんな服部さんに大きな出来事が起こりました。それは、大好きなお父さんの死でした。葬儀には担当職員とともに最後まで参列をしました。落ち着いてから家に帰ったとき、お父さんと会うのを楽しみにしていた服部さんはお父さんを捜して家中を見て回ったそうです。それでも不安になることもなく普段と変わらない姿を見せてくれていたのは、お母さんがお父さんの分までコミュニケーションを取ろうと工夫をし、できるだけ話しかけることを心掛けていたからです。そして、里では仲間がいつも一緒に居てくれました。服部さんと悲しみを乗り越える仲間がいたことは大きかったと思います。お父さんと同じくらい大切な存在であるお母さんに会えるという嬉しさ、いつもと変わらない仲間たちが自分の周りにいる安心感、この2つがしっかりとあるからこそお父さんが亡くなったということを感じながらも乗り越えて暮らしが築けたのではと思います。

4年前に太陽の里の改善が行われ、それまでの男性約20名の集団での生活から、女性4名男性6名の10名での生活へと変わりました。ユニットの雰囲気自体が、以前に比べると「華やかになった」「ゆったりしている」という声も聞きますが、本人はどう感じているのでしょうか。

服部さんは普段は穏やかで物静かな人です。考えごとをしているような表情をしていたり、周りの様子を眺めていたり、音楽に合わせて身体を揺らしていたりします。相手の人の頭の匂いを嗅ぐと、うれしいような、ホッとしたような表情を見せます。また、ふとした時に「フフフ」と大笑いをすることもあります。一方で、慣れない人に対してはとても緊張するようです。学生時代は、好きな先生のそばから離れなかったという話を聞きました。対人関係の幅はとても拡がっていて、日々さまざまな人と接していますが、内心では緊張感もあるのではないかと思います。できるだけ穏やかに楽しく過ごしてほしいと思います。機嫌の悪い時に、まだまだその理由がわからないこともあり、「感じていることを汲み取ってあげられれば」と思うことがあります。

壮年期を少し過ぎ、身体面の不安も出てくる頃ですが、体調を崩すこともほとんどなく、笑顔で時には怒りながら毎日出勤しています。

服部さんのこれまでの人生について聞くと、お父さんとお母さんとの暮らし、男子棟1階での集団での暮らし、大好きなお父さんとの別れ、そして現在の小集団での静かな暮ら

し、それらがあって今の服部さんがいるということを実感します。人間関係、環境、獲得してきた力など、積み重ねてきたものを感じながら、服部さんの今を大切にしていきたいと思います。

一対一の関係から集団の関係へ

村木俊之さんは、今年で42歳を迎えます。太陽の里が開所した20代の頃は男子棟1階での暮らしでした。そのころは、布団をしまったり、テレビのボリュームを上げたりと、自分から暮らしに関わっている姿が多くありました。時折、男子棟2階まで自分で上がって行き、お茶会に参加してご機嫌な姿もあった程です。積極的に仲間と関係を作りに行く姿が多かった村木さんでした。しかし、障害からくる筋緊張が見られ、徐々に身体の硬化が進んできました。現在は車イスを使用しての暮らしへと変わってきています。そのため、徐々に生活範囲も狭まってきました。

村木さんは当時から人との関わりが多かったと聞きます。基本的には、集団に入る事は大好きな村木さんですが、対個人となると、なかなか関係を作るのが難しい仲間もいました。日頃から関係の築きにくかったUさんや同室のIさんとは、よく衝突していたそうです。同室のIさんは村木さんに、ドアを閉められてしまったり部屋から出されてしまったりしました。もしかしたら、2人部屋ということもあり自分の空間が欲しかったのかもしれません。

そこで、集団の仲間を意識できる関わりを大切にしながら暮らしを考えていきました。お茶会や入浴場面などの交流や、余暇でみんなと一緒に外出することで楽しい時間を共有することを大切に、意図的に仲間と自然に関わることの出来る場面を作ってきました。お茶会の時間では、自然に仲間がコーヒーメーカーに集まり輪が出来上がります。楽しみを共有し合うことで、日頃うまく関係を作れない仲間とも笑顔をかわす風景が広がります。人との関わりの広がりは、村木さんの暮らしを豊かに彩ってきたように思えます。

一方で、開所3年頃より徐々に身体的機能の低下、主に歩行の困難さが見られるようになってきました。そこで、リハビリ的要素を盛り込んだ暮らしづくり、仕事づくりに職員は意識するようになりました。暮らしの場面では、歩行や食事を中心にした機能の維持に加えて、立ち上がること、コップを持つこと、食事もできるだけ自分の手を使って食べるようにするなど普段の生活で出来る事についてはゆっくりとですが自分でやるということを大切にしました。仕事は、ウエス作業に取り組んできました。シーツを両手で持ち、勢いよく裂いている姿にやる気を感じるとともに、仕事場面でも、輪を作り仲間同士意識し合いながら仕事に取り組むことを大切にしてきました。現在もウエス仕事で力強くシーツを裂いている姿は健在です。

人との関わり、一緒に物事に向かう事は村木さんにとってかけがえのない時間です。

現在、村木さんは、身体障害を持つ仲間が中心のユニット（新棟北）で生活をしています。男子棟1階の頃とは生活をする仲間のペースもゆったりと穏やかな時間の流れの中での生活風景となりました。一緒の部屋だったIさんとも同じユニットですが、部屋が一人部屋となったことが大きいのでしょうか、良い距離感で一緒に生活をしています。Uさんとは残念ながら別ユニットになってしまい顔を合わせる機会が減ってしまいましたが、顔を合わせてもお互いが意識しすぎることなく良い関係を築けています。

村木さん

時間の経過とともに村木さんの身体的、健康面の配慮の必要性が増えてきました。それでも、新棟北は同じような配慮を必要とする仲間が共に暮らしているので、生活、日課の配慮など一緒に考えて動くことが出来ます。村木さんにとって無理のない暮らしづくりが出来上がっているように感じます。

服部さんも村木さんも人との関わりを大切にすることは現在も変わらないのではと感じます。程よい距離感とのんびりしたペースの暮らしの場ができた中で、2人ともに安心して暮らしを作っていると感じています。ユニットが違っても、顔を合わせると声を掛けに来てくれる仲間がいます。以前と比べ生活範囲は狭くなってしまっても、共に里で暮らす仲間がいる事が生活の豊かさに繋がっていると感じる瞬間です。

太陽の里職員　小林　直行
小寺　直人